

食育に関する結果概要

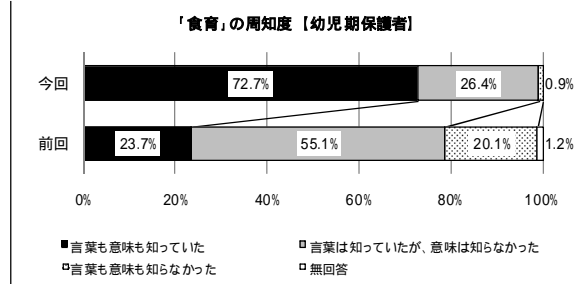
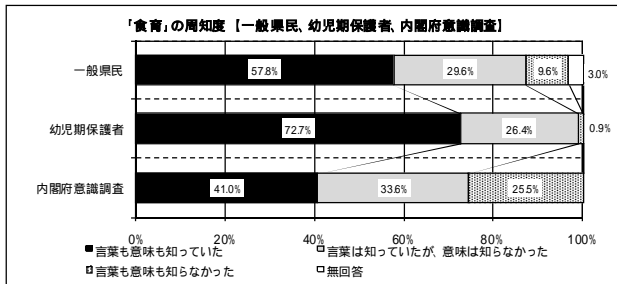
食育の取組について

県民の約9割が、「食育」という言葉を知っている

「食育」について、「言葉も意味も知っていた」と「言葉は知っていたが、意味は知らなかった」を合わせると、一般県民の87.4%、幼児期保護者の99.1%が、「食育」という言葉を知っていた。

また、「言葉も意味も知っていた」割合は、一般県民が57.8%、幼児期保護者が72.7%であり、幼児期保護者では、前回調査と比較すると、49.0ポイントの大幅な増加となっている。

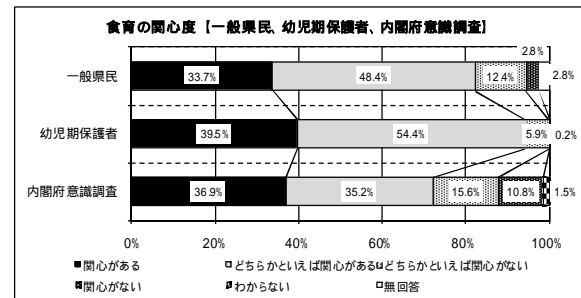
内閣府意識調査と比較しても、県民の「食育」の周知度は高いことがうかがえる。



県民の約8割が、食育に関心を持っている

食育の関心度は、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせると、一般県民では82.1%となっており、8割以上の方が食育に何らかの関心を持っていることがうかがえる。

特に、幼児期保護者では93.9%と、9割以上の方が食育に何らかの関心を持っており、関心の高さがうかがえる。



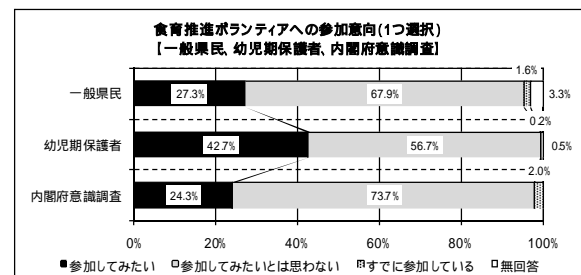
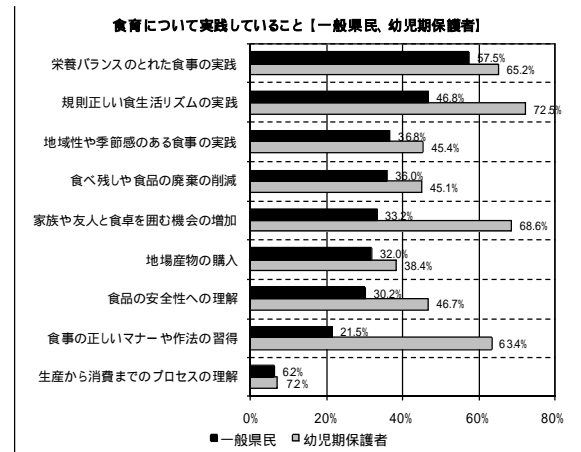
食育について実践していることは、健康づくりに関連した個人でできる取組

食育について実践していることは、一般県民、幼児期保護者とも「栄養バランスのとれた食事の実践」、「規則正しい食生活リズムの実践」等の健康づくりに関連した項目が高くなっている。

一方で、その他の取組の実践率は3~4割程度にとどまっており、特に「生産から消費までのプロセスの理解」は、生産者と消費者の顔の見える関係が求められる中で、一般県民、幼児期保護者ともに少なく、個人レベルでの食育の実践に限界があることがうかがえる。

また、食育推進ボランティアに参加してみたい一般県民は3割未満で、自らの知識や経験を活かして、地域社会で食育活動を進める取組への参加意向は低くなっている。

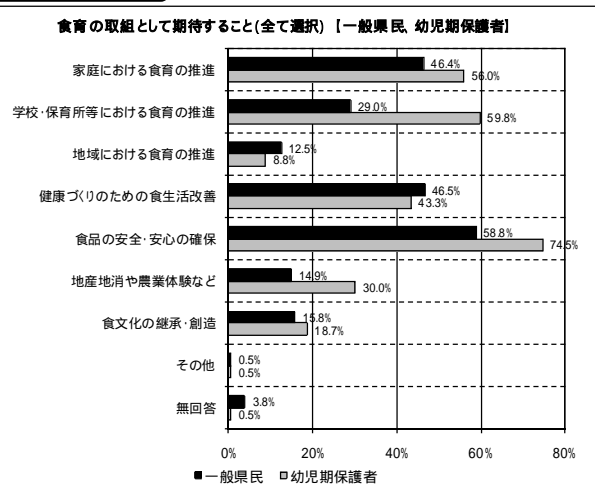
なお、幼児期保護者の参加意向は4割を超え、食育推進ボランティア活動に対する意識が一般県民よりも高くなっている。



食育の取組として、「食品の安全・安心の確保」の期待が高い

食育の取組としては、一般県民、幼児期保護者ともに、「食品の安全・安心の確保」を期待する人が最も多く、食品の安全性に不安を反映した形となっている。また、「健康づくりのための食生活改善」、「家庭における食育の推進」が共通して多くなっている一方で、「地域における食育の推進」が少なくなっている。

一般県民と幼児期保護者を比較すると、幼児期保護者の方が、一般県民より期待が高い項目が多く、食育の取組として幅広く期待している様子がうかがえる。

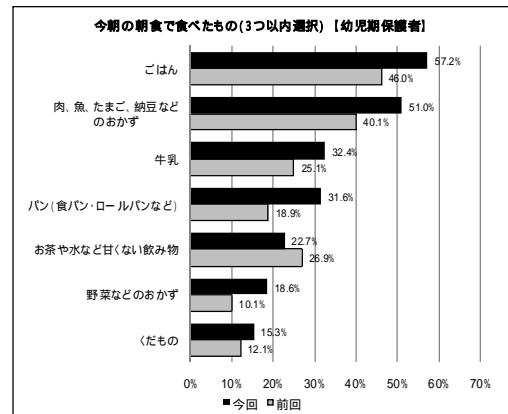
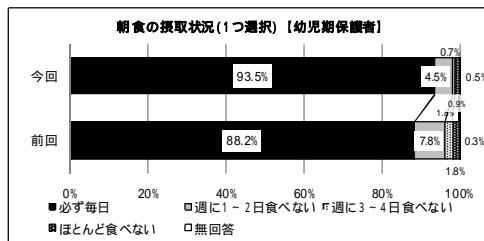


幼児期の食生活

子どもの9割以上は、必ず毎日朝食をとっている

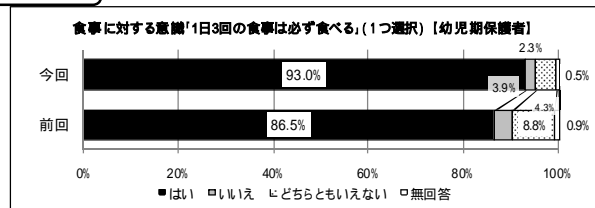
幼児の朝食の摂取状況は、「必ず毎日」が93.5%と、9割以上が毎日食べており、前回調査と比較すると、5.3ポイント増加している。

朝食で食べているものは、主食である「ごはん」や「パン(食パン・ロールパンなど)」の増加とともに、主菜である「肉、魚、卵、納豆などのおかず」、副菜である「野菜などのおかず」も前回調査から増加しており、主食とおかずを組み合わせるようになってきたことがうかがえる。



子どもの9割以上は、必ず1日3回の食事をとっている

「1日3回の食事は必ず食べる」幼児は93.0%で、前回調査と比較すると、6.5ポイント増加しており、規則正しい食生活を心がけている様子がうかがえる。



よく会話する子どもの方が、食事を楽しみにしている

食事の時に家族とよく会話する幼児は約8割で、前回調査と比較して5ポイント増加している。また、食事の時によく会話する子どもの方が、食事をいつも楽しみにしている傾向がうかがえる。

